
隅に置けない図書館

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隅に置けない図書館

【ZPDF】

Z5577D

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

一体どこの図書館は隅に置けないのであるのか。

図書館に張り紙があつました。

『近頃、置き引きが発生しています。お荷物は必ず田の畠へといつに置いてください』

近所に住む中学生の男の子は、それを読んで物騒になつたなあと、小さい頃から住んでいた町が変わつていぐのを感じて、勝手に青春に漫つていました。

すると、向こうから友達が慌てて走つてきました、図書館で走るなんて言語道断なので、男の子は会話をする前に一発ドリンクを食らわせました。

痛そうにする友達でしたが、我に返つて走つてきた事情を話します。

「お前の鞄って、お前の座つてた所に置いてあつたよね？」
「そりだけど、まさかくなつたの？」
「でなきや、図書館を全速力で走るなんて馬鹿な真似しないだろ」
「とりあえず見に行こう

そんなわけで現場を見てみると、物の見事に鞄はなくなつていました。
さうこ明確に言えば、盗まれていました。

「「あんな、居眠りしてたらいつの間に……」「
「つーん。机の隅つこの下に置いたのが間違いだつたね」

男の子は唸つた後、しみじみつぶやきました。

「やつぱり、大切な鞄は、どこにいたって隅に置けないなあ」

そんな図書館での話です。

館長とその部下らしき一人が、ひそひそと話していました。

「館長、こんな大事なものをそんな適当な隅におけるわけがないでしょ？」

「だからってどこに隠せば良いんだよ。私の机に隠して、バレたら私に全ての罪をいざれ着せるつもりか」

「そんなことはありませんけど、ほら、普通にここ人が着ますよ」「心配いらん。一年間ここで館長を務めてきたが、密はこんなマイナーな辞書「一ナーナーなんてほとんどが素通りだよ」「万が一見つかったらどうするんですか！」

「何が見つかると、どうなるんですか？」

突然の乱入者に驚く一人の前には、図書館の従業員がいました。
眼鏡をかけた凜々しそうで、かつ読めない人でした。

「君か、全く脅かさないでくれ」

「何の話をしているつしゃったんですか？」

「仕方ない。ここで君も館長と私の話を聞いた以上、連帯責任で共犯になつてもらおう」

「連帯責任の意味が間違っている気がしますが、何ですか？」

「全く、君は隅に置けない人間だね。いいかい？ 我々は図書館の本に、上手いこと裏で売り買いしてる麻薬を隠しているのだよ」

所員は目を少しぎょっとさせただけで、後は驚いた様子を見せま

せんでした。

とても冷静でした。

「だけど最近客入りがやけに増えたから、場所を改めて考え直そうとしているわけだ」

「君もあんな隅に置いたら絶対にバレると想つよな？ 絶対にあんな隅には置けないよ！！」

館長は、ハゲた頭に流れる汗をハンカチで拭くと、そこからあるものを取り出しました。

「あー、君もうるさいね。大体君は、隠したヤクを勝手に売りさばいたり使つたりしてるの、知らないと思つてるの？」

「ど、どうしてそれを……」

「いつも私に媚びへつらつていた癖に、隅に置けない男だよ」

乾いた音とともに、館長とさつきまであれだけ争論していた部下が、赤い液体を流しながら倒れました。

簡単に言えば、彼は銃で撃たれて死んでしまいました。

「さて、君はさらに共犯が増えたわけだ。これから私と秘密の共用だ」

「あなたも隅に置けない人ですね。よくそんなものを手に入れたものです」

「ヤクがあるならこれだつてね。当然だろ？？」

館長は、まるで暗闇の中で、下から顔を懐中電灯で照らしてお化けの真似をする子どものような、不気味な笑顔を見せました。

「アナタも十分隅に置けませんね」

「わあびつする。勿論秘密を共用してくれるね」

その質問に対する答えは、とてもストレートでした。

「館長さん、アナタを逮捕します」

「……は？」

「実を言つと私、潜入捜査官でして。麻薬密売の証拠を洗いざらで聞いて録音しちゃいました。これであなたはもう大罪人です」

「君……！　なんてこいつた……」

そして捜査官は、手錠を館長にかけようとしたが、止める前に一歩止まりました。

「でも、実は私麻薬中毒で、最近お金なくて買えないで禁断症状に苦しんでるんです。もし私にその麻薬、全てタダくれるなら今回の件は全て見逃しますよ」

「ほ、本当にかい？　き、君って本当に、隅に置けないねえ」「恐縮です」

そうじつて館長は、銃を机のつえに置いて一息つくと、机の引き出しから今度はナイフを取り出して捜査官に襲い掛かりました。捜査官は、あつという間にナイフを奪い取つて、逆にそれで館長さんを殺しました。

「でもあなたには負けますよ。本当に隅に置けないんだから」

早速捜査官は、隠されていた麻薬を全て回収しました。

ずっと禁断症状に悩まされていた彼に、欲望を止める術は無く、早速麻薬を取り出して、躊躇無くすい始めました。

すると捜査官は、いきなり血をゲッと吐き出しました。

「毒粉……？　あのピカハゲ、相棒に横取りされた時のことを考えてこんな細工をしてたのか……？」

捜査官の視界は突然広がり、綺麗な天上窓が彼に光を注いでいるのに気づきました。

「本当に隅に置けないよ……」の図書館

その翌日、麻薬事件は無事解決の日の日を見ました。

「ヤク中捜査官に仕事任せて正解だつたな。釣り餌のおかげでぐに食いついた上に、この不祥事ももみ消しだ」

「警部。警部つて本当に隅に置けない人ですね」

(後書き)

隅に置けないの意味が途中間違つてそつた気がするけど隅に置けない話。これで自ブログからの転載は最後です。これを良い機会として、ブログ閉じようかと思つてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5577d/>

隅に置けない図書館

2011年1月1日14時18分発行